
初恋～Tomomitu Side～

沙山はるか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初恋／Tomomi tu Sides／

【Zコード】

Z7970

【作者名】

沙山はるか

【あらすじ】

ケータイアプリの恋愛シミュレーションゲーム「恋する私の王子様」の二次創作（FF）です。

ゲームの中では、主人公の女の子が6人の王子様候補の中から1人の王子様を選択して、「永遠の初恋」を楽しむものです。

今回は、主人公と先生の場合。特に先生サイドのお話で展開してゆきます。

FF小説抜きに、一つの先生と生徒つていう関係のラブストーリー

と少しも読めぬやうになつてします。（たゞ、そのよつて書きこてしま
わ）

登場人物紹介（前書き）

ケータイアプリの恋愛シミュレーションゲーム「恋する私の王子様」の一次創作（FF）です。

今回は先ず最初にカンタンな登場人物紹介をしたいと思います。

登場人物紹介

藏前 智光
くらまえ ともみつ

・高校教諭 専門科目：地学

・生徒からはダンディー先生との愛称で親しまれ、男女問わず人気のある先生。

・噂では資産家の御曹子。

・愛車は、ポルシェのカイエン。ボディはシルバーメタリック。

・酒よりも珈琲を好む。

滝澤 姫
たきざわ ひめ

・高校2年生。訳あって2年生に上がる時に転校してきた。

・クラス担任は藏前教諭。

・天然キャラで、よく口ケる。

天然キャラが好み系なのか？自然と人の集まつてくるタイプ。しかし、輪の中心で引っ張るタイプではない。

・読書とオシャレが大好き。

<ほかの登場人物 : >

姫の幼なじみ、校外でバンド活動をするギタリスト。愛車はバイク
CSR400…町田蓮

容姿端麗、学業優秀、サッカー少年で学園のプリンス…仙川ヒロト

姫より一つ上、去年までは野球部エース。金髪でコワい印象だが。
千石拓海

姫より二つ上の中学生。電車での出来事で知り合った。…鷺ノ宮潤

アイドルグループPRINCEのリーダー。オレ様キャラ。
朝霞鈴璃

第一話・心のつぶやき（前書き）

まだまだお互い自分の気持ちに気が付かはじめるかどうか・・・って
いつ状態からのスタートです。

第1話・心のつぶやき

私がこの仕事に就いたのは
あまり好まれないこの教科を、少しでも楽しいものだと教えたかっ
たから。

そして、7年が過ぎた。

その間に色々な生徒に出会い、送り出してきた。

例えば、去年、一昨年と担任を持つた野球少年の千石君。
彼が足の故障をし、野球を断念することになった時
また次の希望を見い出して歩き始めた時

私は教師として、人生の先輩として数々の言葉を贈ってきた。

そして、彼は今年に入って活き活きとしている。

そういう姿を見るのはとても嬉しい。

こんな自分でも、誰かのために役に立てたと思えるから。

そう、今年。

今年のクラスはちょっと違つ。

どうしても目がいつてしまう生徒がいる。

まあ、無理もない。転校してきて早々入院。

クラスに馴染むのが遅いスタートになってしまったからな。

ホームルームや私の授業で見る限りでは、一人取り残されている風
は見受けられない。

彼女の幼馴染みであると聞いている生徒もいることだし、上手く馴
染めたのだろう。

良かった。

しかし、普段ならばそこで終わる心配も何故か終わらない。
彼女の言葉や仕草、表情一つ一つが気になってしまふ。

職業柄なのか？

いかんな、彼女を見ていると指導したくなってしまつ。

とりわけ派手なわけでもない。

飛びぬけて騒がしいわけでもない。

いたつて普通の、そぞごく普通の生徒なのだが授業中でも、気が付くと彼女だけに語りかけている錯覚に陥るほど視線がいってしまつ。

今日は朝から一日落ち着かなかつた気分なのはやはり、氣のせいではないのかも知れないな。何故なら、今日は彼女が日直だつたから。

そろそろ日が暮れる。そして、彼女は日誌を届けにやつてくる。

その時、私は上手く仮面をかぶつていられるだらうか？ キレイな夕暮れをバックに、黄昏に氣負い、揺らがないだらうか？

コン。 コン。

地学準備室の扉を叩く音がした。

ゆつくりと控えめなノックの仕方は、姫くんだと直ぐにわかつた。そして、扉の向こうから彼女の声。

「センセ……いらっしゃいますか？ 滝澤です。」

他の生徒ならばノックの後、直ぐに扉を開けて入つてよいとするのに。

彼女はいつも違う。

「どうぞ、鍵は空いているから、入ってきなさい。」

私は作業の手を一旦止めて、扉の方に声をかけた。

「じつ、失礼します。」

ゆっくりと扉を開けると、挨拶とともにヒペコリとお辞儀をして入ってきた。

緊張しているのか？ まるで、ひよこの様に歩きながらやってくる。

トコトコ。 トコトコ。

右手にバッグを提げて、左手で大事そうに田舎を抱えながら。一步。また一步。私に近づいてくる。

さて、キチンと仮面を被らなければ。夕暮れに惑わされぬ前に。

第2話・鼓動

「はい。センセ。今日の日誌書けました。」

妙な胸騒ぎを感じながらも、いたつて普通に机に向かつて授業準備をしているところへ、彼女はそう言いながら手を細めて微笑み、私の右側に立ち日誌を差出した。

私はなるべく…じく自然にそれを受け取った。

「ああ、今日一日苦労さま。」

今私の精一杯の言葉だった。

もつと気のきいた言葉でもかけてあげられたら良かつたんだが、あいにく頭が回らずぶっきら棒な返事だけになってしまった。手にした日誌の今日のページを探すようにめぐり始めた。なにやら心配そうにその中を覗き込む彼女。

「ん? どうかしたかい?」

不思議な緊張感が入り混じり、彼女への言葉を探すあまり、何ともそつけない言い方になってしまった。つと後になつてから自分自身焦っているのに気が付いた。

「えつ! いついいえ。何でもありません。 ただ。」

「ん? ただ? ただ何か気になることでも?」

努めて優しく、オドオドとしている彼女を更に緊張させないためにも、話しやすくなるよう、ひとゆっくりと繰り返し聞いてみた。

「はい。ただ、自分が書いたものって、改めて読むと恥ずかしかつたりするから。

目の前で先生に読まれてドキドキしちゃって。／＼＼＼＼＼

俯きながら、少し頬を赤らめて照れるように笑った彼女はとても可愛いと思つた。

変な意味じゃなく、本当に純粹な気持ちでそう思つた。
星空を見て「ああ、キレイだ。」と思つそれと同じようこそ、素直な気持ちで。

「なるほど。そういうことだったのか。

確かに人はそう感じる事はあるが、私など職業柄、常に自分の言葉でみなに物事を教えている。

時にはそれをプリントというカタチで何枚も印刷し、配つてているから麻痺してしまっているんだろうね。

そういう気持ちは大事にした方がいい。そして、ありがとう。」

私としたことが、いつもはそんなに話をしたりする方ではなく、ただ聞き役に徹している側なのに

今日はホント朝から落ち着かない。

へんな胸騒ぎはするし、良くしゃべってしまったり、全く私らしくないな。

可笑しなことだ。

「そうですね。先生はいつも難しそうなお顔をして何かを書いているって感じがします。

でも、何で？ 何で”ありがと”なんですか？」

緊張がほぐれたのか、彼女は柔らかな笑みとともに私へ質問してき

た。

「あつ。ああ、それはだねえ。

姫くんが、そういう人間として大事な気持ちを思い出させてくれたことに、礼を言つたんだよ。

つがしかし、私は普段からそんなに難しい顔をしているかね？」

「えつ！？ いえ、そんなこと無いです！ つていうか、そのお。」

また、しどろもどろになつて、下を向きながらオドオドしてしまつた彼女を見ていると実に飽きない。

クルクルと表情が変わつて、仕草の一つ一つが言葉以上に物を言つている様で。

そして私自身、居てもたつてもいられない衝動と、いつもにまして早くなつている鼓動に気付かない訳がなかつた。

それを紛らすかのように椅子から立ち、彼女とは反対の左側から机を回り込んで、準備室内の水場へと足を運んだ。

「ハツハツハツ。いいんだよ、姫くん。実に素直でいいと思うよ。そうだ、時間が許すようなら、お礼に珈琲を淹れよう。一杯付き合つてくれるかい？」

「はい。ありがとうございます。」

彼女は足元に置いてあつたカバンを抱えて、明るく柔らかな口調で返事をした。

私はいつものように、いや、いつもは一人分だが、今日は一人分の珈琲を淹れるために湯を沸かした。

「じゃあ、じつちのソファにかけて待つていなさい。直に出来上がるから。」

「砂糖とミルクは入れるかい？」

トレーニング用ショガーポットとペッチャヤー、2つの珈琲をのせて運んでいった。

そして、ソファの左端に固まっているように座っている彼女の前に珈琲を置いた。

「ありがとうございます。じゃあお砂糖1つと、ミルクはたっぷりめで。」

「はい。かしこまりました。お姫様、では。」

そう言いながらショガーポットを取り、彼女の目の前で好みの味を作った。

その後、自分の珈琲を手に取つて、彼女の座っているソファの後ろを回り込むようにゆっくり歩き、彼女のすぐ隣に座つた。

私の右側には、まだなお固まつたまま座つている彼女。

「熱いから気をつけて飲みなさい。」

「うつー、コクン。うわあ、美味しいです！　お店屋さんみたいな味ですねえ。」

小鳥が飲むように少しづつ飲みながら、満面の笑みで喜び大事そうに、カップを両手で包み込むように持ちながら、少し見上げるよう私を見た。

「そうか。良かった。姫くんの口にあって嬉しい。」

そういうてブラックのままだが、私も珈琲を口にした。いつもと同じ豆、いつもと同じ淹れ方なのに、どこか違う。そして、この胸の高なりも、早い鼓動も。やはり彼女と一緒に飲むだけで、こんなにも違ってきてしまったものなのだろうか。

ずっと……ずっとキリの今までいたい。

こいつして一人でいたい。

そう、願ってはいけない。

叶わぬ願いを、今日は一番星に願ってしまった。

第3話・ヒウコの夢

ある初冬の土曜の朝。

私はとても切なく、胸が苦しい気持ちで目覚めた。しかも、涙の痕など残っていた。

不思議なことに、今まで背負っていた何かをおろした様な、何だか身体が軽い感じもしていた。

「久しぶりに、この夢を見てしまった。最近はやっと見なくなつていたというのに。」

身体を起こし、珈琲を淹れるためにキッチンへ向かった。
キッチンへ向かう途中も、珈琲を淹れている間中も、生々しく残る夢の記憶をたどっていた。

天気の良い休日の朝は、まずたっぷりの珈琲を淹れる。
テラスで珈琲を飲みながら新聞を読む。つというのがお決まりのパターンだった。

今日も天気は良い。
珈琲も淹れた。

しかし外の空気に触れたくない気分だった。

つというよりも”晴れわたる空を見たくない”そんな心境だった。

平日の朝と同じように、右手に新聞。左手でコーヒーマグを持ち、リビングへ向かおつとした。

- - - - - ガシャン- - - - -

キッキンの白いスポンジタイルの床には、褐色の液体が広がった。それは、まるで生き物のように床を浸食してゆく。

普段ならば急いで破片を片付けて、ダスター数枚を手にして拭きだすはずだ。

がしかし、呆然と立ち尽くして、ただその光景を眺めているのだった。

「ハカリコ……キミは本当に許してくれるのだらうか？こんな私を。

」

足元に広がる液体に薄つすらと歪んで映る自分の顔を見つめながら、そうつぶやいた。

それと同時に、どうしてこのような状態になっているのかという事態がやつと認識され、カップの破片を片付け、急いでダスターで拭き始めた。

＝＝＝＝＝＝＝ 蔵前智光の夢＝＝＝＝＝＝＝

ここはある大きな病院の病棟の一室。

ベッドにはいくつもの管に繋がれた少女が横たわっている。その傍には、丸イスに蔵前自身が座っている。

彼女は天井を真っ直ぐ見つめたまま話し始めた。

「センセ……そろそろオルフェウス流星群の時期ですね。」

「ああ。 そうか、もうそろそろそんな時期になるんだな。

そうだ！ 天体望遠鏡を新調しよう。 そして、一緒に学校の屋上で観よう。」

いきなり思いついたように話はしたが、地学教諭である私が流星群の飛来時期を忘れるはずがない。

しかも、天体望遠鏡ももう既に購入し、自宅に届いているのだった。

「センセ。 そのまで聞いてくださいね。

たぶん、お母さんから聞いているかと思うけど、私、もうダメなんだ。」

「何を言っているんだ！ 何がダメなんだ！
すっすまない。大きな気をしてしまって。」

急な彼女からの告白というより、宣告のような言葉に私は驚き、彼女の手を握りしめたまま立ち上がった。
その拍子にイスがガタッと倒れた。

彼女は悲しそうに微笑みながら答えた

「いいんです。センセ。

それより！ ダメじゃないですか！ そのまで聞いてくださいね
って言つたのに。

反則ですよ。さあ、座つてください。」

しばらく呼吸を整えるようにしてから彼女は話を続けた。

「たまたま聞いたんですよ、私は主治医の先生とお母さんが
話しているのを。

でも、大丈夫ですよ！ みんなの前では知らないフリしますから。
ちゃんどね。」

涙でぐちゃぐちゃになつたまま、まだなお天井を見据えて、こんなにも小さな身体で戦つているのに、さらに周りの事を気遣つていて。その一生懸命伝えようとする姿がとても痛々しく、自分の無力を実感した。

そして、一呼吸おいてから彼女は再び話しだした。

「先生。『じゅ、じめんなさい。

私、いつ・・一緒に、観られ・・・な・・い・・の。」

ただ何も出来ないまま、言葉もかけられないまま
まるで宙に浮いている様な状態で、その光景を私は眺めている。
いつもならここにでも目覚めるのだが、今日は違かった。
更に上から見下ろされているような気がして、どこからともなく彼
女の声がした。

「センセ。ありがとうございます。

私。とっても充実して幸せでした。

ホントは、ずっとずっとセンセの傍にいて、ここまででも一緒に
星空を観ていたかった。

だけど、大丈夫。私、お星様になっちゃったんだもん。

いつか宇宙に行つて星にキスしたい って言つたじゃない?
あれね、半分叶つた気がするの。

だつて、今は大好きなお星様と一緒に、先生を見守っているんだも
の。

だから、だから先生、もう苦しまないで。

先生だつて、幸せになる権利があるんだから!

私は先生と出逢えてホントに幸せだつた。

だつて、色々なことを教えてもらえたんだもの。

もう、お願ひだから、私を悲しませないでね。ずっと笑っていてね。

そして、夜空を見上げてね。」

＝＝＝

「エウリコ。」

キレイに片付けられた床に座り込んでいた。
どのくらい時間が経つたのだろうか。

薄暗いキッチンからリビングの窓を見ると、柔らかな冬の日が差し
込んでいた。

それはまるで姫くんの笑顔のようだと思つた。

おもむろに立ち上がり、清々しい陽射しに引き寄せられる様に歩いてゆきながら、何かに語りかけるように話しだした。

「そうだな。月の様な僕のエウリコ。

そろそろ朝日が昇る頃のようだよ。用済めさせてくれて、ありがと
う。」

そして薄いレースのカーテンを開け放ち、冬の陽をたっぷりと浴び、
深呼吸をゆっくりと一つした。

「では、出掛けるとしようか。

新しいマグカップを2つと、準備室に可愛いコーヒーカップを1つ

第4話・新しい一步（前書き）

スマスマセン・・・長いです。どうしても分けられなくって・・・つてこうか分けたくないなかつたので。

第4話・新しい一步

とても逢いたくなつた。

逢つて全てを打ち明けたかつた。何もかも。

しかし、明後日にならなければ彼女には会えない。

会つたからといって、私の今の気持ちを全て打ち明けられる訳でもない。

もどかしさを紛らそうとしたのか、それとも何か予感していたのか、急いで身支度をし出掛ける準備をした。

とりあえず、新しいマグカップを探しに行かなれば。
出来たら、必要性は感じられないが、私の満足の為だけだが、彼女のマグカップも一緒に。

そして、また準備室に来てくれる事を期待して、彼女のために可愛いコーヒーカップも探しに行こう。

いつにも増して軽やかな気分の自分に驚きながらも、努めて冷静に愛車を走らせた。

市街地に入ると、やや渋滞気味になり、珍しく苛立ちを覚えた。
仕方がないのでいつもの場所に車を預けてから、歩いて探しに行こう。

いつもの場所とは、以前偶然にも彼女にバッタリ会った喫茶店で、私はその時、姉と軽い口論になっていたところだった。

バタンッ

最低限必要なものだけを手にして車から降りた。

この場所を選んだのは、一番安全で安心出来る場所だから。この近くでまた偶然にも逢えたなら。などという淡い期待が全くなかつたと言つたら嘘にはなるが。

店の前に回り、歩道を歩く人の多さに圧倒されながらも、道を急いで。

しかも、天気の良い休日は男一人で買い物。全く情けない。隣に姫くんがいてくれたなら、買い物も楽しい時間になつたものを。つと思つていた瞬間だった。

たくさんの人混みに押されながら一人フランフランと歩く姫くんを見つけた。遠めだが間違いない。

急いで駆け寄つて声をかけてみた。

「姫くん、大丈夫かい？」

人波に流されるように歩く姫くんの右腕を掴み、私の身体で人波から守るようなカタチで、懐に引き寄せた。

「キヤア！ あっ！ 先生！ ありがとうございます。／＼＼＼＼＼腕の中で、急に掴まれた驚きとすまなそうな顔をして、上目遣いに私を見ながら言つた。

その瞳に一瞬息をのんだが、今朝の記憶がサẤッとオーバーラップして現実に戻つた。

そして、一際大きな紙袋を彼女の手から持ちながら言つた。

「いや、大丈夫だ。少し私が荷物を持ってあげよう。しかし、本当にたくさんの中の荷物だね。」

「あつ、友達と買い物してたんですが、友達は急用が出来て分かれただところだったんです。先生は、今日はお一人でどこかへお出かけ

ですか？」

不意に彼女から質問されて応えに迷つたが、自分でも不思議なんだ
がサラリと本当の事を話していた。

しかも、一度口をついて出た勇気は、大胆にもその買い物に彼女を
誘つてしまつことまでやつてのけた。

「いや、恥ずかしい事なんだが、今朝、私の不注意でカップを割つ
てしまい、代わりのものを行いに来たんだよ。
そうだ、よかつたら、姫くんに見立ててもらおうかな。時間は大丈
夫かい？」

「時間ですか？ 全然大丈夫です！ でも、私なんかでいいんです
か？ とっても嬉しいです！」

驚きの顔と不安な顔、そして微かにいつもの柔らかい笑顔。
クルクルと表情を変えながら嬉しそうに応えてくれた。

「勿論だとも。では、この近くに車を止めてあるから、姫くんの荷
物は積んでおいつ。

一人で他愛もない会話をしながら歩いていると、あつとこう間にア
ンティークショップに着いた。

「素敵なお店ですねえ。先生は、いつもいつもお店に来るんです
か？」

どれもこれも素敵で目が回りそつですう。
えへつと。ああ！ これなんかいいんじゃないですか？ 先生にピ
ツタリだと思うなあ。」

彼女はすっかり店内の雰囲気に魅了されて、目を輝かせながらティ

スプレイをぐるぐる見回して、ゆっくり歩きながら見ていった。

そして、白と黒の市松模様の脇にチエスの駒のデザイン画がいくつか描かれたマグカップを右手で指さし、私の方を向いて左手をヒラヒラと手招きした。

「おお。なかなかいいじゃないか。それに決めよう。では、もう一つ。準備室用にコーヒーカップを一つ選んでほしいんだが、お願い出来るかね？」

彼女が選んだマグカップの隣には、同じデザインで色違いの赤いカップが並んでいるのを見逃さなかつた。

「えっ！？　はっはい。解りました。

うーんと、えーっとお、うわあー！　これって可愛い　うーん、でも準備室用だもんねえ。違うかあ。」

左手を軽く握り、それを顎に当てて考えながら、またゆっくりと店内を見て回つた。

そんな彼女がちょっと戻るように後ずさりして、立ち止まってよく見ていたのは何気に見覚えのあるカップだった。

「いや、可愛い。それにしよう。実はこれは、私が準備室で使用しているものと同じシリーズなんだよ。」

「そりなんですねえ。だから、何だか見覚えがあつて、親しみがある感じがして惹かれたのかもしれないですねえ。」

無邪気に笑うその横顔は、今の私には眩しくて愛しくて、ずっとこの腕の中に抱きしめていたいと思うほどだった。

彼女は、自分が選んだコーヒーカップを、二コ二コと見つめながら大事そうに持つてカウンターに運んでくれた。

私は彼女に気付かれぬよう、チョスの柄のペアマグカップを手にして後から向かつた。

「私は清算してくるから、しばらく店内を見てこいとい。
もし欲しい物があったら一つか二つくらいは買ってあげよう。今日のお礼
だ。」

そう言ひて気付かれぬよう、カウンターから彼女を遠ざけた。

「さあ、見つかりましたか。お姫様？」

今までトコトコと店内を歩いていたのに、ピタリと立ち止まり何か
を見つめているので、そう言つて近づいた。

「あつ。これ。素敵だなあつて思つてて。」

綺麗な装飾が施された小さな箱を手にして、わあっと蓋を持ち上げ
た。するとゆっくりと澄んだ音色で『星に願いを…』を奏でていた。

「では、それを私からのプレゼントにしよう。少し待つていなさい。
すみません！ これをプレゼント用にラッピングしてください！」
可愛らしい包装をして、店員は綺麗なペーパーバッグに入れてくれ
た。

店を出ると深々とお辞儀をして、彼女は本当に嬉しそうに言つてく
れた。

「先生。オルゴール、本当にありがとうございました。私、絶対に
大事にしますね。」

「いや、私の方こそ、本当に姫くんに選んでもらって助かったよ。
ありがとうございます。」

では、薄暗くなってきたし……何しろあの大荷物だしね、帰りは車
で送つてあげよう。」

駐車場に着くとトランクを開け、初めの彼女のたくさんの荷物を積

み込んで、次に先ほど買ったカップの入った紙袋を積んだ。

一緒にオルゴールも入れようと声をかけたのだが、彼女は大事そうに抱えて自分で持つたまま帰りたいと言った。

その姿に愛おしさが込み上げてきて、今まで抑えていたものが堰をきつた様に溢れ出してゆくのが分かつた。

私は必死に自分の感情を抑えながら車に乗り込んだ。

だが、溢れ出た感情は容易に繕いきれなくて、出来るだけ彼女を傷つけないように。ただその事だけに注意しながら、私は私の胸のうちを語つていった。

「少し、私の昔話に付き合ってくれるかな？」

「ゴクリと頷く彼女を視界の端で確認してから、話を続けた。

「この前話した流星群の話は覚えているかな？」

「オルフェウス流星群ですね。」すんなりと応えてくれた。

「そうだ。父と初めて見たのが、オルフェウス流星群だった。宇宙という、どこまで続いているのか分からぬ世界で、たくさんの星たちが瞬いている。

それだけでも夢が詰まっているのに、まるで雨のようにその星たちが一斉に降り注いでいくんだ。

そして次は、学生の時にあのパネルの流星群を撮影した。さらに次の次は、次は、見られなかつた。」

肝心なところにきて言葉が詰まってしまった。この事だけはキチンと話さなきやならないのに！

「センセ？ 大丈夫ですか？ どうして見られなかつたんですか？」

助手席から彼女が心配そうな顔をして、こちらを向いているのが分かつた。

気持ちを落ち着かせるように深呼吸をして、車を脇道に曲がって安全なところで駐車した。

私はハンドルから手を離し、膝の上で拳を握りしめ、目を閉じたまま話し始めた。

「私が新任の先生になつた頃、1人の女子生徒に出逢つた。私が担任をもつクラスにいて、天文部にも所属していた。と言つても部員はその頃は彼女一人になつてしまつていたけど。

とても星が好きな子で、いつも星の写真集を見ていた。どこまでも真つ直ぐでいい子だつたよ。

そして出逢つて2年目に、オルフェウス流星群の飛来する機会が訪れた。もちろん彼女は絶対に見たい!と豪語した。」

そこまで一気に話すと、ゆっくり眼を開けて、フロントガラスを真っ直ぐ見据えて話を続けた。

「彼女はその日をずっと待ち望んでいた。病院のベッドの上でね。気付いた時にはもう手の施しようがないくらい病魔に冒されていたんだ。

絶対に見るんだ。っと彼女は最後まで願つた。あと1日、あと1日、つと。だが、彼女は流星群を見る前に亡くなつてしまつたんだ。私はずっと恐れていた。流星群を見てしまうことで、絆が消えてしまふ気がして、怖かつたんだ。

……生徒以上の感情で、見ていたのかもしれない。とても真つ直ぐで輝いてみえた。私には大切な存在だつたのかもしれない。」

彼女は寂しそうな表情で今にも泣き出しそうだつた。
解つている、そうさせたのは私自身だから。
しかし、いつかは話さなければならない事だから。

「今年のオルフェウス流星群は見に行こうと思つていてる。姫くん。

一緒に見に行かないか?」

今私の精一杯の気持ちを込めて誘つた。

「はっ、はい。」

やはりな、心なし沈んだ声で返事をしてくれた。

良かったんだ。そう、これで良かったんだ。

これからは、私が出来うる全ての事を全身をかけて君を守りやつ。

第5話・告白

また、今日も終わる。

姫くんは相変わらず来てはくれなかつた。

まつ、ムリもない、彼女にとつて私は、担任であり、先生であつて、家族や恋人ではないのだからな。

いきなりあんな話をされて、気分が引いてしまうのも分かる。

しかし、ここ数日は授業中もH.Rの時も、虚ろな瞳で正氣でなさそうだった。

だけども私の方を、ただじつと見つめている視線だけはしつかり感じていた。

上下校の間に事故でも遭わなければいいのだが。

そろそろ私も帰るとするか。

「コン。コン。

「センセー？ 滝澤です。」

姫くん！ いつもの控えめなノックと挨拶。

心配していたところだつただけに、私は身体がビクッとするのを覚えた。

「どうぞ。 鍵は空いているから、入つて来なさい。」

私は努めていつも通りにそう応えた。

しかし、いくら待つても開かない扉に妙な気配と不安を感じた。

帰り支度をやめて、ゆっくり扉に近づいていき、引き戸に手をかけ

た時だった。

「開けないでっ！ センセッ。 つぐ。」

いきなり扉の向こうの彼女は、まるでこちらが見えているかの様に私を制止した。

その声は僅かに震え、詰まらせていた。恐らく、いや確實に彼女は涙している。

今すぐに抱きしめて支えてあげたいのに、どうにも出来ない自分が歯がゆかつた。

そんな自分自身に無性に腹が立ち、思い切って扉を開けた！

「姫っ！」

そう言つのが早いか、ガシッとしつかり抱きしめた。

私の腕の中で力なげに泣き崩れたその身体は冷えきっていた。
今までどこでどんな風に堪えていたのだろう。

「直ぐに温かい飲み物を淹れよう。さあ、中で休みなさい。」「

そう言つて抱き抱えながらソファに連れていき、そつと座らせた。珈琲を淹れるために湯を沸かし、その間に小さめなブランケットを出してきて、まだ微かに震えている彼女を優しく包んだ。

砂糖少しだけミルクたっぷりのカフェオレを入れると彼女の右側に座つて、そつと彼女の手を取りカップを両手に持たせた。

しばらくの間、沈黙が続いた。

どちらからともなく、お互を見つめ合つていた。ただ秒針が時を正確に刻むリズムだけが響き渡つていた。

「センセ。あつ！」

「姫くん。うつー！」

二人同時に呼び合つてしまつた。彼女は言葉に詰まるとき俯いてしまつた。

「すまない。何だね、ゆつくりで構わない、さあ話していいらん？」

氣ばかり焦つてしまつた私自身を反省して、彼女の言葉を待つ事にした。

またしばらぐ沈黙が続き、やつと彼女が口を開いてくれた。

「センセ。あのお、この間はありがとうございました。

私、あれから色々な事が頭の中ぐるぐるとしてて、自分自身どうしたいのか、何を感じて、何をしたらしいのか、分からなくなっちゃつてたんです。

センセ、訳もなく哀しくて。苦しくて。淋しいんです。

でも、さつき、センセに抱きしめ、られて。あつたかかった。」

そこまで言つと、また下を向いて、先日、彼女が選んだ可愛いコーヒーを両手に持つて少し微笑み、カフェオレをコクコクと飲み乾した。

私はゆつくりと頷きながら、彼女の言葉を一字一句聞き逃さないように、彼女の気持ちもしつかり汲んであげられる様に、ただ真っ直ぐに彼女を見つめて聞いていた。

そして、彼女がカフェオレを飲み乾し、カップを置くのを見届けると、ブランケットに包まれた彼女をしつかり抱きしめ、そのままありのままの気持ちを話した。

「姫くん。実は私も最近落ち着かなくてね。訳もなく哀しくて。苦しくて。淋しいんだよ。

それに今日、久しぶりに君がここへ来ててくれて、とても嬉しくて温かい気持ちになれたんだよ。

だから、不器用な私だが、今の姫くんの気持ち、とても理解出来ている気がするんだ。

上手く伝えられているか分からないが、私は君に出逢えて良かったと思っている。そして、私の出来得る全てをかけて、君を悩ます全てのものから守りたいと思っている。」

彼女は腕の中で「ククリ、」「ククリ」と一度頷いた。

まるで「はい。分かりました。」といつもの柔らかい微笑みとともに返事をしてくれたようだつた。

「せういえば、さつきはとても冷え切った身体でここへ来たが、こんな時間になるまでじこにいたんだい？」

飛べない小鳥のように小さく震えていた彼女を思い出し、訪ねてみた。

「屋上です。でも、なるべく風の当たらない場所、知っているので、そこに座つてうずくまつてセンセの事、いっぱい考えてました。いっぱい考えたけど、やっぱり分からなくって。逢いたくなつて、気がついたら準備室の前に來ました。

でも、センセが近づいてくる足音がしたら、何だか急に怖くなつて。

「

そこまで聞くと私は彼女の頭を撫でた。何回も。何回も。

「姫くん。もう分かったよ。もう何も言わないでいいんだよ。もう

大丈夫。私がついているからね。何も心配しなくていいんだよ。ずっと、ずっと君を守つてあげるから。」

そう。もう何も怖がらなくていいんだ。私が君を守る。全てを無くしても、君だけはいつまでも笑っていられるように。後悔は一度としたくないから。

第6話：不安

先月、すっかり冷え切った身体で、夕方も遅くなつて準備室に彼女がやつてきた。

あれ以来早く登校した朝や放課後の地学準備室には彼女がいる。特別に用事がなくとも、友達とフラフランとやってきて話をしていくたり、宿題をしていつたり、そんな風景が普通になつていた。

昨日は、同じクラスの町田君と仙川君とやつてきた。

仙川君が一人の宿題というか勉強を教えていたらしい。

私は自分の机で授業準備やら課題整理などの仕事をしながら、ソファの方の講習風景を眺めていた。

もちろん三人とも同じクラスということは、私がクラス担任している生徒つということでもある。

彼女としては、町田君は幼馴染みだし、仙川君は町田君の親友。な

のだから親しいクラスメイトつという感覚なのだろう。

しかし、私自身の気持ちに気付いてしまつた今となつては、私の胸中は穏やかではいられなかつた。

なぜこの私が嫉妬心などに惑わされなければならぬのだろう、まったく大人気なくて情けない。

しかも、放課になると彼女を待つてソワソワと落ち着かない自分に気がつく。

今日は、来ないのだろうか。

いや、来られない日には、休み時間なり放課後なりにメールを入れてくれている。

だから、きつと来るはずだ。

しかし、嫌な予感が過ぎる。明確なイメージではなく、ただ何となく良くない前兆の気配を感じているだけだ。

彼女の身に何も起こってなければいいのだが。そう、ただの気のせいであつて欲しい。

「コン。コン。

「センセ？ 姫です。」

ノックする音で、直ぐに彼女だと分かった。

その瞬間 いつものように彼女が名乗っている間に 扉へ向かつて走っていた。

ずっと彼女が来るのを待っていたからだけでなく、嫌な予感がしたのもあって、彼女の姿を早くこの瞳に写したかったから。

彼女が名前を告げ終わると同時に私は扉を開けた。もちろん彼女は驚いて一步後退りするように上体をのけ反らせた。

「姫、大丈夫か？ ケガなどないか？」

そう言って両肩をガシッと掴んだ。

「ひやつ！ だつ大丈夫です！」

大きな瞳をパチパチとさせて一言言つた。

「よかつた。ホントによかつた。今の君に何かあつたら私は。」

そう言いながら、彼女の両肩を掴んでいた手を放して、ゆっくりと下ろした。

そんな姿を不思議に思つて、心配そうな顔で覗き込みながら彼女が今度は聞いてきた。

「センセ？ デウしたんですか？ 何かあつたんですか？ センセ。」

「そういうと、カバンを持ち準備室に入るなり、後ろ手に扉を閉めた後、私の両手を包むように握り締め、少し淋しそうな顔で聞いてきた。

「センセ。私は、センセの傍にいていいのかな？ ホントに一緒にいてもいいのかな？」

私はあの子になれないし、私は私だし。 だけど、私はセンセの側にいたいんです。

つりあわない子供だって分かってるし、センセみたいに何でも出来るってわけじゃないけど。

私もやっぱりセンセのこと好きだし。ずっと一緒にいたい。」

ストレートな物言いに私は驚いた。しかし、それ以上に胸に刺さったのは

『私はあの子になれないし、私は私…』

そう、自分の都合ばかりで話をしていて、彼女にとてもツライ想いをさせていた事に初めて気付いた。

不器用にもほどが過ぎる自分にほとほと呆れた。

「すまない。ホントにすまなかつた。

君がそんなにも悩み苦しんでいたなんて、少しも気付いてやれなかつた。』

頭を下げる私に向かつて、今にも泣き出しそうな彼女は首を横に振つた。

「せん…せ…い。」

「これだけは信じて欲しい。今の私には、君はかけがえのない人で、何よりも大切な人だ。』

誰の変わりでもなく、そのままの君が大切なんだ。

だから、だからもうそんな風に不安にならなくていいんだよ。

”子供や大人”だとか”何が出来る出来ない”だとか、今は不安に思つたり辛く思う事が多いかもしない。

だけどそんな時はいつでも私の所へ来なさい。その不安を全て取り除いてあげよう。」

真っ直ぐに彼女の瞳を見つめながら私は私の全てが届くように願いながら話した。

そして、彼女を強く抱きしめると

「ずっと一緒に。しかし、未来がある君だから一時の気の迷いや憧れから、その輝かしい未来をこんな私が取り上げてしまつては。という思いもある。

ただ憶えておいて欲しいのは、いつまでも私は君とずっとといたいと思つてゐる。」

その時、視界の端にある窓から流れ星が一筋、流れて消えたのが見えた気がした。

第7話・魔法

今日は、私の勤めている学校の入学試験日。だいたいの生徒は、今日から4日間ほど医学魔術とこじりこなつていて休みだ。

私はいつも通り学校への道で車を走らせていた。大きな交差点の信号で軽い渋滞に遭い、ふいに歩道に田をやると、彼女が急いで歩いて「おはよー」と言つよつと走りしていた。

「おはよーー姫くん！」と声をかけた。
彼女はビクッとして振り返った。

「センセーーおはよーいぞーい！」

いつもの柔らかい陽の光の様な笑顔で駆け寄ってきた。

「とりあえず乗りなさいー！ 気をつけ！」
まだ赤のままの信号とバックミラーで後続車やバイクが来ていないかを確認してから一言だけ言った。

「姫くん、今日は入試日だから君は休みなのでは？」
つと彼女がキチンと乗ったのを確認すると、車を発進させながら私が尋ねると

「あつそなんですが、私、保護者控室の係なんです。」

「ああ、なるほど。交替制で担当があつたね。お疲れ様。では、終わったら準備室に寄りなさい。」

数週間前までは考えられないが、今の私は、なんのためらいもなく自然にそう応えていた。

そして彼女の方も同じ事で、いつも通りの感覚で自然に返事をしてくれた。

「はい。じゃあ最後の控室の片付けとかまで終わってからなので、3時過ぎくらいになつたら行きますね。」

この入試が終わり、春になつたら彼女は3年生になる。ずっと一緒にこんなふうにいたいと願うのはいけないのだろうか。

夕方の地学準備室。

2月の夕暮れは早い。あつといつ間に空が藍色に変わってゆく。

「姫くん。今日は一日お疲れ様だつたね。」

私は一人分の珈琲を淹れながらソファに座る彼女を見遣ると、オルフェウス流星群のパネルを薄つすらと微笑みながら見ていた。

「楽しみだなあ。私、たくさん流れ星見るの初めてだからあ。星座の観察日記は以前課題でやつたけど。」

うつとりとした顔で口元にやや笑みを浮かべてそう言つた。

「姫くん。カフェオレが入つたよ。

もう少しだな。春になつて桜が咲き、その桜が散つたら直に流星群が見られるよ。

観察日記か。冬の夜空は澄んでいて見つけやすいから、オリオンの

移動の様子など観察させるよね。」

テーブルの、彼女の前辺りに例の「コーヒー カップを置いた。

私は珈琲を片手に、彼女の左側に腰を下ろして一緒にパネルを見ていた。

「そうです！　まさしくオリオン座の観察を絵に書いてくるつてい
う課題だつたんです。中学生の時なんですけどね。」

パネルから私の方へクルッと顔を向けて、驚いた眼をパチパチさせていた。

「そうだ！　課題といえば、この自宅学習期間の課題は上手く進み
そうかね？」

マイペースの彼女のことだから、少しずつ課題は進めているかと思
うのだが、やはり心配になつたので聞いてみた。

「うつ。それは、進んではいますが。上手くはいってないかもで
す。あつ！　でも、今日の交替で待機の時間にもやつてたんですよ。
やら心配は的中していたようだ。

パネルを元通りに棚に掲げて、ソファへと戻る足が止まつた。どう
やら心配は的中してしまつた。

そして、自分なりに進めていることも一所懸命説明するところも可
愛いと/or>え思つてしまつ。

「そうか。困つたね。では、理数系の課題なら見てあげられると思
うが、いかん、もうすっかり暗くなつてしまつたな。お家の方へ連
絡入れなくては。」

二人でゆつくり過ごす時間も白昼夢のようで、時々全てが夢なので
はないだろうか？　と疑いたくなつてしまつほどだ。

急いで帰り支度をし始めた私に彼女は驚くことを言った。

「ああ、両親なら旅行で留守なんです。年末に地元商店街のクジで母が当たった温泉旅行に2泊で出かけてるので。母なんて、『この日程だったら、学校が入試でお弁当作りしなくていいから、ちょうどいいわ』なんて言つてて。」

「じゃあ、時間的には大丈夫でも外はもう暗い、私の家で課題を見てあげよう。どうだい？」

驚きとためらいと不思議な感情が交じり合いながらも提案してみた。彼女の返事を待つほんの数秒がとても長く思えた。

そんな落ち着きのない私の胸中とは正反対で、純粹に喜ぶ彼女が満面の笑みで承知してくれた。

「えっ！…いいんですか？ センセと一緒に居られるし、課題もはかどるし、暗い夜も怖くないし、とってもとっても嬉しいです！」

「わがままを聞いてやるのが男の役目だ。君は特別だ。私の前では遠慮しないでいい。

それにまだまだ寒い季節、暗い夜の時間は長い。そんな中で君を一人ぼっちにさせておけるほど、私は大人ではないからね。」

すっかり夜の魔法にかけられてしまつたかもしれない。

恥ずかしげもなく、彼女には素の自分自身をさらけ出してしまつ事にためらいが無くなつてきている。

やつとあのマグカップを箱から出せる時が来たな。

課題を進めながら、あのチエス柄のペアマグカップを並べたら、彼女はどんな表情を見せてくれるのだろう？

それはあと1時間後のお楽しみだな。

大切にするよ。そして、暗い夜も怖くなこよつに、全てのものから
君を守るわ。騎士ナイトになつて。

そう、君は私の愛する可愛いお姫様だから。

第8話・やさりや

薄暗い幹線道路を走る。

彼女は知らない町並みにキヨロキヨロと観察しているようだ。車に乗せた事はあれから何度もあるが、初めて自分の家に彼女を招くことで、まるで10代のようにならぬ落ち着かない自分がいた。

「姫くん、お腹は空いていないかい？」

別段食べたい気分ではなかつたが、実際食事をしてもおかしくない時間帯だつたのと、何か話でもしていないと余計落ち着かなかつたからだ。

「あつはい。ちょっとは空いてきたかな？」

今日は遅めのお昼だつたけど、たくさんの受験生の保護者の方にお茶を出したり、誘導してたりしたから緊張しちやつて。何処にお昼ご飯入つたか分からないくらいです。」

「そうかあ。では外で夕飯を済ませてから家にいこう。」

普段も一人だからと簡単に済ませたり、外食メインで済ませているものだから、さらつと覚えてしまつたのだが、意外な彼女の反応に驚いた。

「えつダメですよ！ カンタンなもので良ければ私が作りますから。スーパーかコンビニでもいいので寄つてください。」

男が一人で住んでいる部屋は、普段氣にも止めなかつたが、閑散としていてモノトーンで無機質な空間だというのに気がついた。

彼女が部屋にいるだけで空気が違つ。爽やかな新緑の風が吹いているようだ。

更には、彼女が話す言葉や笑い声は、ヴィヴィッドな色彩で部屋の中を一気に彩つてゆく……まるでここが自分の家だと信じられないくらい。

大きめなコンビニで買つてきた食材たちは、彼女の手で手際よく調理されてゆく。

卵を絡めてピカタ風だつたり、野菜たっぷりのスープだつたり。普段のおつとりとした彼女からはイメージ出来ないくらいだ。

スーツを脱ぎ部屋着に着替えると、何も出来ないままキッチンの入り口で壁に寄りかかり煙草を吸いながら、その一部始終を眺めていた。

「センセー！ 手を洗つてきてくださいね。后は盛り付けて並べるだけだから。」

チラリとこむらを見て、あとは器に盛り付けながら言つた。
そんな風景に見とれ、今すぐ彼女の全てを奪いたい衝動にかられた。その突き上げる衝動を振り払う様に眼をつむり、キッチンを後にサニタリーで手を洗つたが、鏡に映るそんな自分を見てとても醜く情けなく見えてその場に崩れそうになつた。

「センセー。出来ましたよー！ 食べましょおー

なかなか戻らない私を彼女が呼ぶ。その声で我に戻つた。
早くこの家に連れてきたいと何度も思つたことか。

しかし、もうしばらくはよそつ。このままの関係を保てなくなりそうだ。

そして、全てをかけて守ると誓つたのに、彼女を傷つてしまつてしまつ

となる。

そうしたら、今度こそ自分自身を許せなくなつてしまつ。

そう思いつつも、私は愚かだ。自問自答しながら決心は揺らぐ一方だった。

「す、じいじ、馳走だなあ。姫はもつひとつお嫁さんにきても大丈夫だなあ。」

何も隠さず、素のままの私を受け入れてくれる彼女に對しての本心だった。

決してお世辞でも何でもなく、本当にこのままずっとこうしていたかった。

「え、つーーーーーそんなあ。あ食べましょー。」

「「いただきますっ！」」

両手をそっと合わせた瞬間、““いただきます””の声が重なる。

声が重なった後、二人の目が合つてお互ひ微笑んだ。

その時恥ずかしさと共に心の奥がくすぐつたくて、でも温かさを感じた。

こんな幸せがあることも彼女が教えてくれた。

他愛ない会話をしながら過ぎてゆく。

幸せな空間と彼女の作った美味しい料理、満ち足りたこの時間にも限りがあると思うけどどこか物悲しい。そして楽しい時間はあつとう間に過ぎてゆく。

そもそも空いた器が出始めた頃、いつ話そつかと思つていた事を切り出した。

「食べてる時だけ、私から姫に一つ聞いておきたい事があるん

だがいいかな？」

こんな時に？ とも思つたが、こんな時だからこそ… とも思つて話してみた。

彼女はキヨトンとした顔で箸をくわえたまま「クリとうなずいた。

「以前にも話したが、もう一度言う。私はずっと姫と一緒にいたい。君自身が大人への憧れから私を見ているのなら、出逢った頃の私たちに戻つた方がいい。

その時でも卒業するまで君を守り続けるよ。

しかしそうでないのなら、君も一生傍にいてくれると思うならば、私も一生をかけて君を守り続ける。」

少し厳しい言い方で選択肢を用意してしまったが、無論仕方がない。そのくらい私も全てをかけて彼女の事は大切にしたい愛しい人だから。そう自分自身に言い聞かせるように思つていた。

「返事は私を呼んで応えてほしい。悲しいけど前者を選ぶなら”先生”と呼べばいい。

同じ想いでこれから歩んでいくてくれるなら”智光”と私の事を名前で呼んで欲しい。私が姫と呼ぶように。」

「……………智光さん。」

彼女は初め俯いたまま言いかけて、しっかりと真っ直ぐに私の眼を見て、ハッキリと名前を呼んでくれた。

「ありがとう。 すまなかつた。

こんな辛い選択をいきなり持ちかけて。大人気ないが姫といふと自分がどうしても抑え切れないで、答えを急いでしまう気持ちに駆られるんだ。許してくれ。」

私は本当に酷い男だ。

こんな状況でNOとは言えないのをいい事に、自分の決意を彼女に

負わせるなんて、みつともない姿を晒しているのは充分承知だ。それでもこんな私を受け入れてくれるなら。

「智光さん？ そんな謝らなくていいんです。だって、先生だけど、その前に智光さんっていう一人の男の人なんだもの。私だって初めはただ嬉しいだけだったけど、時が過ぎて日を追うごとに色々迷って悩んでつちに、私も同じような事考えてました。

センセの隣にいるのは私なんかでいいのかな？ なんて思つたり。だから、智光さんが言ってくれて良かつたです。決心つきましたし、自信つきました。私。」

キラキラとした瞳で私を真っ直ぐ見つめ、少女の顔ではなく強い女性……母親のような表情で彼女は胸のうちを話してくれた。

初めのうちは危なつかしい彼女を守つてやりたいと思つていた。しかしんだんと惹かれていたのは、無意識のうちに、こんな強い部分を感じとつていたのかも知れない。

そして、今まで近寄ってきた女性達とは違う凜としたところと家庭の温かさのような安らぎを感じたのかもしれない。

静かに食事を終えると、彼女は食器を片付けて洗い物をしました。私は上の棚からずつと開けられなかつた箱を取り出した。珈琲を淹れ終わる頃、彼女はリビングのソファとテーブルの間に腰を下ろし課題を広げたところだった。

「さあ、珈琲が入ったよ。数学か、頑張るうか。」

向かい合つようになに座りながらマグカップを一つ並べて真ん中に置いた。

「あ～～っ！ あの時の！ 嬉しい／＼一緒に並んでたんですよ

ね
」

二つ並んだカップを見つめながら、満面の笑みで両手で両頬を包む
ようにして驚きと嬉しさの入り混じった感情を隠しきれないようだ
った。

「驚いたかい？ ひと目見て私もコレは！ と思って、実はあの時
買つておいたんだよ。覚えていてくれたんだね。嬉しいな。」
こんな日が早く来ないかと待ち望んでいた場面が、今、目の前に広
がっている。

カップを並べて微笑む彼女が目の前にいる。今の私にとつてこの上
ない幸せな風景だ。

守り続けると誓つておきながら……実際の所は、私の方だったのか
もしけない。

まあ、こんなにも優しく心地よいものならば、たまには悪くない。
ん？！ だとしたら、私は本当の意味で彼女を守れているのだろう
か？

そして、守り続けられるのだろうか？

いや。今日は、この鮮やかであたたかな空間にひたつていたい。

明日考えられることは明日考えればいい。

私はもう一人ではない、一人で考えればどんな難問も解けるはずだ。

第9話・流星群

約束の日。

私には色々な意味でスタートの日もある。
数えるほどで皐月だが、まだまだ直接肌にあたる夜風は冷たく感じる。

予定より早めに家を出発して、彼女の家に向かつた。

まだ小さく見えるあの赤信号を右に曲がった細い路地を行くと直に彼女の家が見える。

きつといつもの様に門の前に立ち、私の車が走つてくる方をじっと見つめているはずだ。

今夜は、オルフェウス流星群が飛来する。

やはりいつもの様に待つてくれた。

ピタリと田の前に車を止めると、車高の高いこの車にやつと慣れてきたようで、一人で頑張つて乗つてきた。

「こんばんは。姫。じゃあ、私のとつておきの場所へ行こうか。」

「はい！ お願いします！」

柔らかく微かな笑みとともに軽く頭を下げて答えた。

「姫。疲れないかい？ もうすぐ着くからね。」

1時間くらい北に車を走らせて、目的地が見えてきた。

初めのうちは今日の日を楽しみにしていた様子を話してくれたりしたが、だんだん口数が少くなり、外の景色ばかり眺めている様になつた。

「はい。大丈夫です。山とかつてあんまり来た事ないから、なんか

緊張してきちゃつて。しかも夜で暗いし。」

「怖いか？ 私がちゃんと見てる、安心して欲しいな。」
それを聞いて、いかにも怖くないです！ と訴えるかのように、首を横に振つた。

しかし、それはかえつて怖いと思つてゐるのが容易に分かつてしまふた。

以前も夜が暗くて怖いと話していた彼女。

そんな彼女のために、安心出来る場所を考えて計画していた。

展望台の駐車場に着いた。

車を止めると、一人で荷物を下ろして準備をした。

「智光さん！ こっちのベンチじゃないんですか？」

車の前方から両手を挙げて、左右に大きく振りながら彼女が聞いてきた。

「ああ、今日はそこでは首が疲れてしまうよ。こっちに来なさい。私は車のトランクから毛布を左手に抱え、右手にいくつかの荷物を取り出すると、駐車場の北側でなだらかな斜面になつてている方に向かつた。

それを見ると、彼女は仔犬のように小走りして後からついて來た。

なだらかな斜面にシートを広げ、その上に毛布を広げた。

そして、大きなバッグから望遠鏡を出して組み立てて、ちょうど良い感じにピントを合わせた。

そんな準備の間に彼女はもう一枚の毛布に包まり、私の動きをじつと見ていた。

「さあ。ここから夜空が手にとる様にみえるよ。みて、いらっしゃ?」

ピントを合わせた望遠鏡に彼女を促した。

毛布に包まつたままモゴモゴと動いてきて恐る恐る覗くと、すぐに私の顔を見るように向き直り感動をあわらにしていた。

「智光さん! すごいすごい! ホントに宝石箱みたいにキラキラしてます!」

「どうだい? 気に入ってくれたかな? しかし、これからもずっとすごい天体ショーが始まるから待っていてくれ。」

持つてきていたタンブラーを差し出しながら話すと、彼女は両手で包むように受け取った。

彼女は私のことを見上げながら微笑んだその時! 私の頭越しに最初の光の一筋を見つけたのだろう。

「あっ! 今、星が!!!」

慌てて私も彼女の指差す方へ眼を見やると……たくさんの星たちが、まるで雨のように夜空を駆け抜けてゆく。キラキラ、キラキラと暗闇を飾る宇宙の宝石箱だ。

「すごい! キレイだなあ。」

「ああ、本当に綺麗だ。」

二人肩を並べて、斜面に広げた毛布に仰向けて寝転び、降り注ぐ星のシャワーを浴びた。

そして、眼を閉じて、心の中で星に伝わるように、祈るようにそっと願った。

(君を天に捧ぐ、 もよおなら……エウリコ。 私は彼女と共に必ず幸せになる。)

「とつ、智光さん? 大丈夫ですか?」

一人毛布に包まり、腕の中の彼女は心配そうに見上げる。

「ああ、ちょっとした願い事さ。」

内心、“まつ、嘘ではないからな”つと思いつつ笑って答えた。すると、彼女も同じように眼を閉じた。

とめどなく降り注ぐたくさんの星たちの下、そんな彼女が堪らなく愛しくて、一呼吸あいた後、そつと瞼に口づけた。

しばらく、その素晴らしい天体ショーを寄り添いながら眺めていた。どれくらいそのまま眺めていたのだろう。

ほんの数分とも思えるが1時間とも思えるし、その満ち足りた気持ちのまま、ただただ時だけが過ぎていった。

「さて、寒くなってきたし、これからどんどん冷えてくる。そろそろ帰ろう。」

上体を起こしてから、周りのものを片付けながら彼女に話しかけた。「はい！ ジヤあお手伝いしますね。……智光さん。今日はホントにありがとうございました。」

「おや？ 『機嫌だな。それに素直だし。』

いつもならキチンとした返事はするものの、その後は俯いたまま礼を言う彼女だったが、今日はこっやかに私の顔を見ながら礼を言ったので驚いた。

「だって、本物の流星群は想像していたよりも、もっともっと凄かつたんです！ パネルで見た何倍も綺麗だったし　それに智光さんと一緒にこんなに綺麗な星空を見られて、とっても幸せな気持ちになつたから。」

キラキラと瞳を輝かせながら答えるものだから、私までつられて答えてしまつた。

「ああ、私もこんな風に穏やかな気持ちで流星群をまた見られるなんて思つていなかつたし、何より君とこんなに素敵な星空を見られ

て幸せな気持ちでいっぱいだ。本当にありがとうございます。」

ゆっくりと車を走らせるに次第に雲行きが怪しくなってきた。
山の天気は変りやすい。

さつきまで月と星明りで薄明るかつた景色も、空がどんどんよりしたと思つたとたん厚い雲に覆われ、ポツリポツリとフロントガラスを濡らした。

遠くの方からは雷鳴が聞こえてきた。

雨は大粒になり、更に強さを増した。

彼女が怖がるのに充分なほど雷鳴は近づいてきた。

時折稻妻が光ると、ビクッと両肩を上げて怖がる彼女を視界の端に確認した。

そんな中、私は一刻も早く山を降りようと急いで車を走らせた。

しかし雨は激しくなり、視界は悪くなる一方だったので、車を安全な場所に寄せて駐車した。

怯える彼女の肩を優しく撫でた。

「大丈夫だ。姫君には私がついている。決して怖い思いはさせない、だから大丈夫。」

シートを倒し、後ろにあつた毛布一枚手繰り寄せた。

それで震える彼女を包むと、まるで迷子の仔犬を大切に抱きかかえる様にして、優しく撫でながらじつと天気が落ち着くのを待ち続けた。

「そう、姫君。大丈夫だよ。私はいつでも君の傍にいるから。
離れはしない。そして、離はしない。」

第10話・白木蓮

季節が移り変わるのは早い。特にこの一年はとりわけ早く感じられた。

毎日がとても充実していて、満ち足りた気持ちを実感する一年だったように思つ。

春。

一人で流星群を見に行つた。

もう一度と見ることはないだろうと思つていた流星群。

あんなにも素晴らしい星空を、心穏やかに見る事が出来たのは、彼女のおかげだ。

そして、大人だつてまだ変わることが出来る。そう教えてくれたのも彼女だつた。

夏。

少し遠出して海浜公園と水族館に行つた。

そう言えば、急に進学希望だつた彼女が、就職希望に変えたのもこの頃だ。

無理を承知の上で、いつもは自分から赴かない実家へ足を向けた。「いつも頼み事ばかりで不精な弟だわ。」と言わしながらも姉に頭を下げ、私の代わりに姉のサポート役をする。という位置に据えてもらつた。

本当に彼女は不思議な子だ。未来が見えるのではないか？ 時々そういう思うことがある。

彼女の言動が全て滑らかなメロディーとなつて、周囲の人々の気持ちまで和ませてしまう。

秋。

お互いすれ違ひの多い時期だった。

誤解が生じて、苦しかった思い出の方が多いかも知れない。

その後誤解は解け、美術館巡りに行つたり、たくさんの映画を観たり……

同じ時を過ぎし、言葉だけでなく伝えようとする気持ちが一番大切な事も知った。

ただ、この時は口に出す事が出来なかつたが、今なら言える。

好きだ。君に触れるたび、私は君をより好きになつてゆく。

そして、冬。

彼女が「残り少ない学生生活を、友達とたくさん思い出を作りたい！」つと言いました。

そうして、色々と計画しては、楽しそうに充実した時間を過ぎしていく。

その時々の彼女のやわらかな口差しのような笑顔が、私の中の黒く濁つた何かを洗い流して、日々の疲れをも癒してくれた。

彼女と出逢つて2度目の春がくる。

君は卒業を迎える。

私も意を決する時もある。

卒業式を終えて、最初の週末を迎えた。

控えめな陽射し、気温はやや高くなつてきた程度だが、肌を過ぎる風は春を感じさせるものだつた。

これまで人の前で話をするのは、職業柄煩わしさを感じたことはない。

しかし、今日ほど何をどうのよつて話したりいのか？何から話し始めたらしいのか？

緊張、戸惑い、焦り、色々な感情が入り混じった極限状態と言つてもいいだろう。

私は今、これまで生きてきた中で最も緊張した状態で車を走らせ、ある場所へと向つている。

角を右に曲がつて路地をしばらく走ると目的地だ。一人の男としての決戦の時だ。

静かな和室に通された。

一人座つてじつと時を待つ。

庭先では白木蓮が咲き、匂いに誘われて小鳥が集まりさえずつている。

「お待たせしてしまつたかな？ 今日はよく来てくれました。」
そう言って少し怡幅の良い男性が入ってきて、私の前に腰を下ろした。

「いいえ、今日は貴重な休みの日のお時間を頂戴いたしまして、申し訳ありません。」

座っていた私は座を正し、深々と一礼して応えた。

そして、静かに深呼吸するとゆっくりと顔を上げて、男性の方を真つ直ぐに向いた。

すると私の緊張を察してか、優しい表情で先に話しかけてきてくださつた。

「まあ、足を崩してください。直にあれも来る。そしたら君の決意を聞こづじやないか。」

そう言い終わる頃、廊下を歩く足音がした。

「智光さん、いらっしゃい。」

彼女がにこやかにお茶を持って部屋に入ってきた、私の隣に座った。もうその時点で息が止まるのではないかと思つくらいだった。

心臓は今までにないくらいの速さで動き出し、両手の平にはじつとりと汗をかき、喉はカラカラになつてゆっくりと唾を飲み込んだ。そして、眼を瞑つたまま一言だけ言った。

「私の全てをかけて必ず幸せにします。姫さんと結婚させてください。」

それからは頭の中が真っ白になつて記憶がない。

ただ隣に座っていた彼女が、抱きついてきたのだけは覚えている。

あとから彼女に聞いた話では……

転校してきて出逢つた時の事から始まって、今に至るまでの話。自分の生い立ちや現状、どうして教員になつたのかなどの話。結局、自分自身のプレゼンがしばらく続いて力尽きたかのように倒された。

そう、記憶に残っている彼女が抱きついてきたのは、私を支えるための腕だつたのだ。

気が付いた時は和室に横になつていた。

芳しい白木蓮の香りと心安らぐ調べとともに目を覚ました。

横になる私の隣には、聖母の様な笑みを浮かべた彼女が座つていた。あの時のオルゴールを手にして。

最終話・純愛

最近週末は、彼女はウチで過ぐすよくなっていた。きっかけは夏休み、家にいる時間が多くなつた私のもとへ、食事を作りに来てくれる様になつてからだと思つ。

彼女が在学中の2年間で、乾燥した学校に彼女がいるという景色に慣れ過ぎていたようだ。

今年は、自分自身でも驚くほどの仕事量を、機械的に事務的にこなし、毎日が無機質な感じに過ぎていっている。

以前は地学という地味な学問を、もつと親しみをもつて地学の楽しさを伝えたいつと思つていた。

そして、今でも教員という仕事に誇りを持つてはいるが、以前のような情熱は薄れている気がする。

一方彼女の毎日は、姉から蔵前グループの歴史に始まり、現状の事、これからはどのように発展させたいかなど、新人研修と称して色々吹き込まれていたらしい。
もつとも姉の元についてから半年近く経つた今では、定期的に父の見舞いに行つたり、私と会社とのパイプ役として充分な程の仕事ぶりだ。
まつ、少なくとも私とは正反対で、充実した毎日を過ぐしていこうだ。

今日は金曜日、彼女の笑顔と手料理に癒されて、また一週間を終える。

はやる気持ちを落ち着かせながら帰り支度を始めた。

彼岸過ぎの風にのって、街中を金木犀の香りが包んでいる様だ。

それは地学準備室にも……

彼の帰りを待つ彼女の部屋にも……

それから1時間ほどした智光の部屋では、彼女が夕食の仕込みを終えようとしていた。

彼女のケータイが鳴る。

それは上司でもある、智光の姉からの着信音だった。

彼女は急いでケータイを手にした。

「はい。滝澤です。……えつ！ 本当ですか？ はい、はい、307ですね、分かりました。」

彼女は慌てたように、でも一つ一つ自分で確認するように頷きながらメモ用紙に何かを書き始めた。

それを書き終えると、メモを片手に各部屋から色々な物を大きな力バンに詰め始めた。

その大きな力バンと自分のハンドバッグを掴むと、急いで部屋を出て行つた。

息を切らしながら辿り着いたのは、街の総合病院。

小さな身体に大きな力バンを持って廊下をウロウロとする彼女は『307』を見つけた。

扉の前で左手の甲で両頬をぬぐい、その後深呼吸を3回もした。

「失礼します。」

小さな声で一言かけながら扉をゆっくりスライドさせて入つていった。

先ず視線を扉に近いほうへ。こちらのベッドは空いていた。

ゆっくり視線を窓際の方へ移すと、静かな寝息を立てて彼が眠っていた。

そつと近づいて、音を立てないよう丸イスへ腰掛けた。

時、程なくして看護師が検温のためやってきた。

彼女とのやり取りに気付いてか、彼は目を覚ました。

「姫。すまない。」

横になつたまま、眼を細めながら真っ直ぐ姫の瞳を見つめて一言謝つた。

「いいの、謝らないでいいの。」

彼女の家で倒れた時のように、聖母の様な柔らかな笑みを浮かべながら言った。

そう思つてみると、今度はまるで幼稚園の保母さんか、小さい子をしつける母親のような口ぶりで話した。

「さつき聞いたけど、ストレスと疲労、それから過度な喫煙からだつて言つてたわよ。

これからは無理はしないでくださいね。それと本数減らしましょうね。

そうしないと、血に吐いて倒れるどこのじや済まなくなっちゃいますよ！ 分かりますか？

そうならない為にも私は智光さんの傍について、お姉様のもとでも頑張ってるんじゃないですか。

つて今日のところはゆっくり休養とする事だけ考えてね。」

「ああ、分かつてます。」

この半年の生活を振り返れば、反省すべき点ばかりで相当無茶なペ

ースで身体を酷使していた。

今日も来月の文化祭の準備を手伝い、いつもの様に準備室で仕事をしていた。

彼女を思いながら帰り支度を済ませ、地学準備室を出たあとだつた。

少し深めの咳を数回し、クラクラとめまいがしてしゃがみ込み動けなくなつていった。

「姫、君には感謝している。これからは身も心も強い人間にならなければな。

そうならなければ、君をいつになつても守れない不甲斐ない男のままだ。」

改めて自分自身を見つめ直すと、本当に強くそう思つ。

そんな私を黙つてうなずきながら、一言も聞き逃さないようにひとつ真剣に聞いてくれているのが良く分かる。

「そしてここにじばらくは、君と歩く未来を思い描きながら、一日も早く一緒に暮らせることを願つて休養をとることにするよ。少し照れるが、こんな時だからと思つて言つてしまつた。

「そうね、それが一番の休養の仕方かもしれないわね。」
と彼女は少し頬を赤らめながら小さく笑つた。

やや冷たくなつた風が吹いて、パラパラと金木犀の花を散らす。
道行く人はオレンジ色の縁取りをした路地を足早に急ぐ。
誰にも気付かれない痩せ細つた上限の月が細く輝いていた。

1週間ほどして退院し、ゆっくりと通常の生活に戻つていった。もちろん無理はせず、今まで以上に明日からの事を考えて計画し、行動するようになつた。

そして、一年後の彼女の誕生日に合わせての計画も少しづつ練られていつた。

ゆつたりと休日の午後を彼の部屋でくつろぎながら、華やかな雑誌のページをめくりながら彼女は言つた。

「智光さんは、真っ黒よりもシルバーグレーに黒の差し色がある方が似合ひと思つなあ。」

「君の選んだものなら何でも喜んで着るよ。さあ珈琲が入つたよ。テーブルの中ほどにいつもペアマグカップを並べて置いた。そんな彼を見上げるようにニコリと笑うと彼女は、見ていたページを彼が見えるように広げて見せた。

そこには彼女にそつくりなモデルが純白のドレスをまとつていた。ページの中では、カトレアのような華やかさで一人に微笑みかけていた。

最終話・純愛（後書き）

長々とおしゃか金こべだせつあつがとびやれこまつた。

不慣れながらまた一つ締めくくりを迎えることが出来てとても嬉しいです。

今度は姫サイドのお話も書こしてみたいと思つてこます。
よひしがつたら、やがておしゃか金こじきたり更に嬉しく思こます。

本当に、本当にあつがといひやれこました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7970j/>

初恋～Tomomitu Side～

2011年9月10日21時44分発行